

いちのたにふたばぐんき

一谷嫩軍記

〔解説〕宝暦元年（一七五一）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したものの。三段目までは並木宗輔が書いたがこの段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させた。

〔ここまでのあらすじ〕源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「二枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣する。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆく。後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰る。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行く。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよう。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようとするが、靡かぬのに腹を立てて姫に刃を向ける。

〔組討の段〕一方、敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせるが、熊谷が勝負を挑んで呼び止める。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷く。熊谷は敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと情けをかけるが、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼む。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、助けてやろうとするが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討つ。そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶える。熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのであった。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

組討の段

去る程に、御船みふねを始めて、一門皆々船に浮かめば
乗り後れじと、汀みぎわに打寄れば、御座船ござふねも兵船も、遙
かにのび給ふ。

無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船に馳
着いて、父経盛に身の上を告げ知らすことありと、
須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあらざれば
せんかた詮方波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。かゝ
りけるところに後より、熊谷次郎直実。

「ヲ、イ、〜」
と声をかけ駒を早めて追っかけ来り、

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。
正まことなうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。
かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せ

ん返させ給へ」

と、扇を上げて指招き、

「暫し〜」

と呼ばはったり。

敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ、敦盛
駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひに打物抜きか
ざし、朝日に輝く劍つるぎの稲妻かけ寄り、かけ寄せちや
う〜、蝶の羽がへし諸もろ鐙あぶみ、駒の足並かつしか
つし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖はひら〜。
群れゐる千鳥村千鳥むら〜ぱつと、引汐に、寄せ
ては返り、返りては又打ちかくる虚々実々。勝負も
果てしあらざれば、

「いそうれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば、

「コハしをらし」

と熊谷も太刀投げ捨て、駒を寄せ、馬上ながらむずと組み

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鎧を踏みはづし両馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて押へ、

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名譽を顕はし給へ。又今生こんじょうに何事にも思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」

と懇ねんじろに申すにぞ。敦盛御声爽かに、

「フ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せんこと生前しょうぜんの面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘れ

がたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ参議経盛の末子ぼし、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしき。木石ならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打払ひ、

「この君一人助けしとて勝軍に負けませまじ、折節外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う、折節といひ捨て、立別れんとするところに、後の山より武者所数多あまたの軍兵。

「ヤア、熊谷。平家方の大将を組敷きながら助くるは二心に紛れなし。きやつめ共に遁すな」と声々に罵るにぞ、熊谷ははつとばかり、『いかゞはせん』と默然もくねんたり。

「とても遁れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて
下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御
身が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給
へば、いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、弥
陀の利劍と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の
様なる御粧ひ。『情なや無慚や』と、胸も張り裂く氣
後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ
討ちかねて、歎きに時も移るにぞ、

「ア、後れしか熊谷。早々首を討たれよ」

と、捻ぢ向き給ふ御顔を見るに目もくれ心消え

「悴小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の
先駆けして薄手少々負うたる故、陣屋に残し置きた
るさへ心にかかるは親子の仲。それを思へば今こゝ
で討ち奉らば、嗚や御父経盛卿の、歎きを思ひ過ご

されて」

と、さしもに猛き武士も、そゞろ涙にくれぬたる。

「ア、愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招

けとはこの事。早首討つてなき後の回向を頼むさも

なくば、生害せん」

とすゝめられ、

「ア、是非なし」

とつつ立上り

「順縁逆縁俱に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。人の見る目も恥づかしと、

御首をかき抱き、くもりし声を張り上げて、

「平家の方に隠れなき、無官の太夫敦盛を熊谷ノ次

郎直実討ち取つたり」

と呼ばはるにぞ、磯に伏したる玉織姫、絶え入りし
気も一筋に、夫を慕ふ念力の、耳に入りしかむつく
と起き

「ノウ暫し待つてたべ。敦盛様を討つたとは、いか
なる人かなふ恨めしや。せめて名残に御顔を、一目
見せて」

と云ふ声も、深手に弱る息遣ひ。見るより熊谷御首
携へ歩み寄り、

「敦盛を慕ひ給ふはいかなる人」

と尋ぬれば、今際の苦しき声音にて、

「我こそは敦盛の、妻と定まる玉織姫。お首はどこ
に。エ、もふ目が見えぬ」

と撫で廻せば、

「ム、何、お目が見えぬとや。ヲ、いとしやいとし

や。御首はコレ、コレに。に。に」

と手に渡せば、わつと泣く泣くしがみ付き、膝に乗
せ抱きしめて、消え入り絶え入り歎きしが、

「なふコレ敦盛様。ア、はかない姿になり給ふのふ。

陣屋を出でさせ給ひしより、御跡慕ひ方々と、尋ぬ
る中に源氏の武士平山の武者所、我を見付けて無体
の恋慕。騙し討たんも女業、この如く手にかゝり、二
人が二人で悲しい最期。せめて別れに御顔が、見て
死にたいと思へども、深手に心が引き入つて、目さ
へ見えぬか悲しや」

と又御首を撫でさすり、

「宵の管弦の笛の時、後にとありしお詞が、今生後
生のかたみかや。この世の縁こそ薄くとも、来世で
は末永ふ、添ひ遂げてたべ我が夫」

と顔に当て身に添へて、思ひの限り声限り、泣く音
は須磨の浦千鳥。涙に浸す袖の海、引く汐時と引く

息の、知死期と見えて絶え果てたり。熊谷は呆然と、
「エ、どちらを見ても蕾の花。都の春より知らぬ身
の、今魂はあまざかる、鄙に下りて亡き跡を、問ふ人
もなき須磨の浦。なみなみならぬ人々のなり果つる
身の痛はしや」

と、悲歎の涙にくれけるが、是非もなくなく玉織の、
亡骸を取り納め、ほろ襖をほどいて敦盛の御死骸を押包
み、あげまき総角取って、手綱を手繰り結び付ける。鞍の塩
手やしをしをと。ゆんで弓手に御首携へて、右に轡の哀れ
げに、だんとくせん檀特山のうき別れ、しつた悉陀太子を送りたる、しやのく車懸
童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに

(帰りけり。)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。